

コントラクトブリッジ実践的教授法の研究(3)

清水映樹[†] 滝沢武信[†]

コントラクトブリッジはオークションとプレイの2段階で成り立っているゲームである。コントラクトブリッジをまったく知らない人に教える場合でも、最初から複雑なビディングシステムを覚えさせなければならない。早稲田大学では比較的短期間でも教えられる新たな実践的方法を提案し、実際に入門者向けセミナーで試みた。本稿では、その継続として開講した授業の2年度目の事例を報告する。

A Consideration about Practical Teaching Method of Contract Bridge (3)

Eiki SHIMIZU[†] and Takenobu TAKIZAWA[†]

Contract bridge is a game consisted of two stages of the auction and the play. Even when telling people who don't know contract bridge at all, it's necessary to make them remember complicated bidding system from the beginning. We proposed the new and short practicing way and experienced a seminar for actually guiding newcomers. In this article, the authors discuss a case study of the course (the 2nd year) that is continuance of the seminar at Waseda University.

1. はじめに

早稲田大学ゲームの科学研究所では、2008年10月から2009年1月にかけて、コントラクトブリッジ（以下、ブリッジと略す）の入門者向けセミナーを実施し[1]、その成果を受けて2009年4月からはほぼ同一の内容で正規科目の授業を開講した[2]。本稿では、その継続として2010年4月から実施した授業での事例を報告する。

2. 授業の概要

授業は2009年度同様、前期（2010年4月から2010年7月）後期（2010年10月から2011年1月）とも同一内容で行った。シラバスの抜粋と受講者数の実績を表2-1に示す。

表 2-1 講習内容と受講者数の実績

回	タイトル	テーマ	2009 前期	2009 後期	2010 前期	2010 後期
1	ブリッジの基本	トリックテイキングのルール	14	22	18	19
2	ミニブリッジのやり方	ブリッジのルールとスコア	16	22	19	18
3	ノートランププレイ	アナーの昇格とエスタブリッシュ	12	20	16	18
4	トランププレイ	ドロートランプとラフ	12	18	16	16
5	フィネス	フィネスとドロップ	16	25	18	16
6	試合	ミニブリッジのチーム戦	12	23	15	18
7	ビディングシステム	システムの成り立ち	13	22	15	12
8	オープンとリビッド(1)	1スータハンドのビッド	13	22	15	15
9	オープンとリビッド(2)	バランスハンドのビッド	12	21	14	14
10	オープンとリビッド(3)	2スータハンドのビッド	13	21	15	10
11	ディフェンス	ディフェンスの約束事	13	15	14	15
12	競り合いのオークション	オーバーコール	14	22	14	12
13	試合	コントラクトブリッジのチーム戦	13	23	11	13
14	アドバンスコース(1)	スラムアプローチと上級プレイ	12	23	12	11
15	アドバンスコース(2)	システムの補足と上級プレイ	8	17	10	11
合計			193	316	222	218

[†] 早稲田大学ゲームの科学研究所
Game Sciences Laboratory, Waseda University

3. 2009 年度との違い

3.1 前期授業

(1) 授業の構成

基本方針はいままで通りとし、授業の進め方や講義内容についても原則として 2009 年度と同様にした。基本方針は次の 5 つである[1]。

- ・ミニブリッジから始め、プレイの基本を身につけさせる
 - ・ハンドを 3HCP レンジで分類し、ハンドの強さの感覚を身につけさせる
 - ・テキストは使用せず、その場で理解できることだけを説明する
 - ・チーム戦形式での実戦を重視し、運に左右されないゲームであることを実感させる
 - ・特定のビディングシステムにはこだわらず、ビッドの考え方を理解させる
- 講義内容を絞り、実習中に各テーブルで適宜補足する方法もそのまま踏襲した。

(2) 2009 年度からの改善点

2009 年度授業で指摘された問題点[2]のうち、受講者の修了レベルが低下したことに対しては、復習用の小テストを実施することで基本的なプレイテクニックの定着を図った。ただしビッドについては、特定システムの考え方を押し付けることになりかねないため、作成を見送った。

第 2 週目に出題した小テスト問題の例を図 3-1 に示す。

No.1	S -	Trick			
NoTrump	H K732 D Q2 C -				
S - H AJ9 D 43 C 2	<table border="1" style="margin: auto;"> <tr><td>N</td></tr> <tr><td>W E</td></tr> <tr><td> S</td></tr> </table>	N	W E	S	S - H Q10 D 10986 C -
N					
W E					
S					
	S - H 4 D AKJ75 C -	Lead			

図 3-1 小テスト問題の例

South からリードして何トリックとれるかという問題で、最初にリードするカードととれるトリック数を答えさせるものである。図 3-1 はブリッジプレイヤーなら誰でもわかる簡単なものであり、授業でも「短い（枚数の少ない）ほうのウィナーからとる」というセオリーを繰り返し強調するため、全員が正解することを期待した問題である。このレベルの基本問題を毎週 8 問出題し、宿題として提出させることにした。

(3) 問題点

実際には、紙上でカードプレイの問題を考える行為そのものが相当困難だったようで、問題の難易度にかかわらず正答が少なかった。基本的なプレイテクニックの確認として第 2 週目から 4 週にわたって実施する予定であったが、問題を見直す必要があると判断し第 3 週目で中止した。結局、受講者の修了レベルに向上はみられなかった。

3.2 後期授業

(1) 授業の構成

基本的に前期と同様に進めた。ただし講義時間を若干長めにし、より丁寧な説明を心がけた。

(2) 前期からの改善点

小テスト問題を見直し、カード枚数を原則 4 枚に減らして考えやすくするとともに正解をひとつに限定できる配置にした。作り直した小テスト問題の例を図 3-2 に示す。

No.1	S -	Trick			
NoTrump	H J10 D K2 C -				
S - H 9 D J109 C -	<table border="1" style="margin: auto;"> <tr><td>N</td></tr> <tr><td>W E</td></tr> <tr><td> S</td></tr> </table>	N	W E	S	S - H AQ D 43 C -
N					
W E					
S					
	S - H K D AQ5 C -	Lead			

図 3-2 作り直した小テスト問題の例

(3) 問題点

カード枚数を減らして単純化したにもかかわらず、やはり正答が少なかった。後期も4週にわたって実施する予定であったが、基本的に方法を変える必要があると判断し、第3週目で中止した。結局、受講者の修了レベルは向上せず、逆に低下した。

4. 成果

4.1 実践的教授法の成果

セミナーから2010年度までの、実質受講者と修了者（単位取得者）、うち初心者とその中で即戦力といえるレベルの人数、およびそれぞれの比率を表4-1に示す。

表4-1 成果

項番	講座 区別	受講者 T	修了者 M	比率 M/T	初心者 B	比率 B/M	即戦力 P	比率 P/M
1	セミナー	6	5	83%	3	60%	2	40%
2	2009 前期	14	12	86%	10	83%	5	42%
3	2009 後期	19	16	84%	12	75%	5	31%
4	2010 前期	18	13	72%	9	69%	5	38%
5	2010 後期	17	10	59%	6	60%	0	0%
6	合計	74	56	76%	40	71%	17	30%

(注) 実質受講者：途中1～3回で放棄した者は含まない。

初心者：ボード数をこなし、その都度学んでいけば問題ないレベル
 即戦力：このまま一般の競技会に参加しても迷惑をかけないレベル

2009年度では、講座を修了した4人に3人は一応プレイができるようになり、さらにその半数はブリッジプレイヤーといえるレベルまで成長したと結論づけた[2]が、2010年度の結果をみると、後期で顕著にレベルが下がっている。特に、即戦力といえるレベルまで成長した受講者はひとりもいなかった。次章で示すように、原因のひとつは出席率の低下であろう。講義も聴かず実習もしなければ、何も理解できるはずがない。

それでも半数以上の受講者にブリッジを続けるためのベースが築かれ、毎回新たなブリッジプレイヤーを誕生させていることは確かな成果といえよう。

4.2 試験の結果

修了試験は、いままでと同じくビッドからハンドを想像する問題[1]である。8種類のハンドの中には明らかに誤りといえるものがあり、それら誤ったものを1つまたは2つ選んだ人数とその比率を比較した。結果を表4-2に示す。

表4-2 誤答した人数と誤答率(1)

項番	講座 区別	受験者 T	誤数1 X	比率 X/T	誤数2 Y	比率 Y/T	誤答者 Z=X+Y	比率 Z/T
1	セミナー	5	0	0%	2	40%	2	40%
2	2009 前期	12	4	33%	1	8%	5	42%
3	2009 後期	19	8	42%	4	21%	12	63%
4	2010 前期	13	4	31%	0	0%	4	31%
5	2010 後期	10	0	0%	1	10%	1	10%
6	合計	59	16	27%	8	14%	24	41%

また2009前期に追加した問題[2]についても、誤った答を記入した人数とその比率を比較した。結果を表4-3に示す。

表4-3 誤答した人数と誤答率(2)

項番	講座 区別	受験者 T	誤数1 X	比率 X/T	誤数2 Y	比率 Y/T	誤答者 Z=X+Y	比率 Z/T
1	セミナー	-	-	-	-	-	-	-
2	2009 前期	12	3	25%	4	33%	7	58%
3	2009 後期	19	7	37%	10	53%	17	89%
4	2010 前期	13	4	31%	4	31%	8	62%
5	2010 後期	10	4	40%	3	30%	7	70%
6	合計	54	18	33%	21	39%	39	72%

表4-2は2010年度後期で誤答が激減したことを示しているが、表4-3からは特に改善傾向が読み取れない。毎回教え方を工夫していることは確かだが、表4-1のように修了レベルが低下していることを考慮すると、特筆すべき変化ではないと思われる。

5. 問題点と今後の課題

復習用の小テストの正答が少なかったため、修了試験のときに同じ問題を出題し、過去にはできなかった基本問題が、実習を続けただけでどの程度できるようになったかを見ることにした。

第2週目の宿題を提出し、かつ修了試験を受けた受講者は5名であった。修了試験として宿題から抜粋した問題は6問である。結果を表5-1に示す。

表 5-1 宿題と修了試験での正答数 (全 6 問)

項番	出題時期	受講者 A	受講者 B	受講者 C	受講者 D	受講者 E	平均
1	授業宿題	4	3	3	2	1	2.6
2	修了試験	3	6	5	1	3	3.6
3	正答数差	-1	+3	+2	-1	+2	+1.0
参考	試験得点	29	36	36	29	24	30.8

平均でみると正答数が 1 問増えており、授業を重ねるにつれて基本テクニックが定着していったことを示唆しているが、個別にみると正答数が減った受講者も 2 名いることに注意が必要である。同じ問題であるから正しく理解していれば間違えるはずがなく、この 2 名に関しては基本的なことが身につけていないと思われる。参考として修了試験 (45 点満点：上記問題は含まない) の得点を示したが、この 2 名に関しては全体的な理解不足がうかがえる。逆に正答数が増えた受講者 3 名のうち 2 名は修了試験の得点も高く、授業内容が正しく身についたものと判断できる。もう 1 名は最終的に 3 問しか正解しておらず、正答数が増えたといっても全体的な理解不足は否めない。

このように受講者の修了レベルに顕著な差が見られるのは 2009 年度前期から一貫して変わらない傾向である[2]。受講者それぞれの資質や意欲によるものが大きいと思うが、教え方にもさらなる改善が求められよう。表 5-2 はこれまで実施した改善策の一覧である。これら改善策の効果を定量的に評価することは難しいが、表 4-1 を見る限り逆効果になっている可能性も排除できないと思われるので、今後何らかの評価方法を検討する必要がある。

表 5-2 改善策

項番	改善時期	レベルアップ策	フォローアップ策	研究支援策
1	2009 前期	—	単位取得者も参加許可	修了試験問題追加
2	2009 後期	ハンド解説配付	ビデオガイド配付	試合スコア回収
3	2010 前期	小テスト実施	ジャッジテーブル配付	実習スコア回収
4	2010 後期	小テスト改善	講義メモ配付 (欠席者)	小テスト答案比較

今後の課題はやはり修了レベルの向上にある。そのためには、まず受講者が授業に参加し、講義を聴いて、実習ハンドをプレイすることが前提である。表 5-3 はこれまでの出席状況である。2010 後期は今までと比べて明らかに低下している。一部欠席者には講義メモを配付したが、読むだけで簡単に理解できるものでもない。これまで出席率にはあまり着目せず、改善策としてはブリッジの知識や技術を定着させ向上させることを目指してきたが、それ以前に出席率を高めるような工夫も忘れてはならない。

表 5-3 出席状況

項番	講座区別	実質受講者	出席 15 回	出席 14 回	出席 13 回	出席 12 回	平均出席回数	平均出席率
1	セミナー	6	1	0	2	0	11.3	76%
2	2009 前期	14	4	3	1	2	12.5	83%
3	2009 後期	19	5	4	4	3	13.1	87%
4	2010 前期	18	3	3	4	2	11.8	79%
5	2010 後期	17	3	2	2	3	10.8	72%
6	合計	74	16	12	13	10	12.0	80%

(注) 平均出席率：平均出席人数 / 実質受講者

6. おわりに

2009 年度から継続して、単位取得済みの学生に任意の授業参加を認めてきたが、2010 年度は前期後期合わせて 5 名が随時参加した。うち 1 名はセミナーから 3 年越しである。さらに授業終了後には 2009 年度と同様、次年度のアシスタントに立候補したり、ボードとビデオボックスを個人購入する受講者もいた。特筆すべきは、ブリッジをまったく知らなかった 2010 年度前期の受講者が講座修了後ブリッジクラブに入会し、日本のユースとして活躍していることである。実際、形はどうであれ、それぞれの受講者が継続してブリッジと親しんでくれることを期待している。なお、いままでの経験と研究をもとにティーチングマニュアルの作成にも着手した。さらなる事例を増やして研究を重ね、完成させていきたい。

謝辞 ブリッジの正規科目を 2010 年度も継続して開講するためご尽力頂いた皆様に、謹んで感謝の意を表す。

参考文献

- 1) 清水映樹, 滝沢武信: コントラクトブリッジ実践的教授法の研究, 情報処理学会研究報告, 2009-GI-21, pp.93-100 (2009)
- 2) 清水映樹, 滝沢武信: コントラクトブリッジ実践的教授法の研究 (2), 情報処理学会研究報告, Vol.2010-GI-23 No.6, pp.1-4 (2010)
- 3) JCBL HP <http://www.jcbl.or.jp>
- 4) 東京大学 全学体験ゼミナール 『考える力を養う「コントラクト・ブリッジ」』 HP <http://lecture.ecc.u-tokyo.ac.jp/~sbob/bridge/index.html>
- 5) Ron Klingler : Guide To Better Card Play, Victor Gollancz (1990)
- 6) Henry Francis : The Official Encyclopedia of Bridge, ACBL (2002)